



117  
2254

明治十六年一月第一期試験問題

廿三日

○万葉集問題

木村正辞撰

第一家吉閑ノ旧訓イハキカム今改テイ(キカナトスコノ理由如何)

第二 内野ニ遊獵片<sub>レ</sub>中皇<sub>ニ</sub>余<sub>ノ</sub>天皇<sub>ニ</sub>献<sub>リ</sub>タル歌ノ趣旨如何

第三 軍王ノ歌ニ還比奴礼波<sub>ト</sub>ル<sub>ト</sub>客<sub>ホ</sub>之<sub>有</sub>者<sub>ト</sub>ル<sub>ニ</sub>シ<sub>ハ</sub>字<sub>ノ</sub>係<sub>リ</sub>如何

第四 三山歌ハ何等ノ意ヲ寓シタル歟

第五 此也<sub>ト</sub>イフ<sub>ヲ</sub>詞<sub>ノ</sub>用法如何

○古今和歌集問題

久米幹文撰

第一

117 2385

信童の烟ふまゝて人をこぼすまゝの者はなをのひ  
言砂古いのえのま川にあひおのやくにたあへ男山の  
むうしを思ひ出せばこころのしと身残るるまじう  
をいひてそなたさまあはるる

第三

うねる梅子未ぬる雪をみれば雪けもいふまゝにふりて

第四

たらのまの光をあはるる我をれとうらの雪となるるそは

第五

春やとみ花や木をよとまわらむ雪もふりてなるはあは

第六

春とてと能く見る山雲はわうらるる雪もふりてなるはあ

第六

春のふ草よやうらうやわらば松のまきをうねりうらるる

第七

千早撫神のりやうのまをふ雪は秋よあははらうらひまら

第八

うねる雪は秋をみれば雪もふりてなるはあ

第九

秋の山に雪をみれば雪もふりてなるはあ

第十

秋の山に雪をみれば雪もふりてなるはあ

秋雪日

○唐宋八大家文向題

岡松麿谷撰

第一 尋隊土緒之茫々獨旁搜而遠紹障百川而東之迴狂瀾於既例

第二 焚頂燒指百十為君羊解衣散錢自朝至暮日轉相倣效惟恐後時老少亦奔波棄其業次

第三 遠徵軍士行者有羈旅離別之思居者有怨曠騷動之憂本軍有饋餉煩費之難地主多姑息形迹之患

第四 苟可以富其巧智使機於心不挫於氣

第五 絳人陳玄弘農陶弘會稽楮先生如何之人也

廿五日

○日本書紀問題

飯田武卿撰

第一日本書紀ノ起リハ何帝ノ御心ニシテ何レノ頃撰修セシヤ又其撰者ノ人名ヲ問フ

第二 以殿馭盧嶋為國中之柱

第三 吾是男子理當先唱

第四 豐葦原千五百秋瑞穗之地

第五 木祖句々迺馳神ト倉稻魂豐宇氣姪神ヲ屋船神ト申ス理由如何

廿七日

○禁秘抄問題

松岡明義撰

第一 賢所ハ何殿ニアルヤ

第二 奏杖ノ制表并用

第三 后女御更衣ノ別ハ

第四 復冬ニ更衣ノ期節ハ

第五 女房ノ禁色ハ

第六 向籍

○古語拾遺向題

小杉相郎撰

第一 古語拾遺を召向一のし 其原因ありや

第二 紀記ともふ神室三統を二種神室といひ

第三 其又二季の末ト

第四 大嘗の由基主基宮

第五 大地主神の管内の糸巻尾子ありて子似多

たたり

○古事記向題

本居豊穎撰

第一 帝紀本辭之説

第二 天地始生にリサマラ 概畧ニ并ス

第三 布斗麻途之解

第四 黄泉戸喫ノ解

第五 伊那志許米志許米岐織國ノ語ノ釈

○源氏物語カ一册卷向題 同上

第一 ありておまをけまきうぬふまうくちのうつくし  
あまをわきをあけしの物なくあまをわき  
まきくーぬふ

第二 例の人のさすたるふまきなりとてをわきまき  
出ぬんやうたり

第三 世をいとふ心山よりまきをわきまき

第四 山たるまきぬあまの物もあまをわきまき

第五 ころそ世の外のまきひまきとあまをわきまき  
うたりまきうたり

三十七

〇令義解向題

十中村清矩撰

第一 律令格式ノ差別

第二 近江令大宝令養老令製作ノ年代並時世

第三 長上官番上官ノ別

第四 中務省ノ詔書ヲ宣奉行スル次第

第五 大藏省ヲハ省ノ中ニ置ケル由縁

〇源氏物語相壺巻并書

佐々木弘綱撰

第一 ちりこころしつゝこころをさうよこ我々世も乱れあり  
うらぐれとやりくすあのこころもあちちかたうの  
ちりこころとちりこころ

第二 階上を別り遠のうたさうあちちかたうのこころ

第三 ちりこころのつはせしさいのいとちりこころちりこころちりこころ

ちりこころちりこころちりこころちりこころちりこころ  
ちりこころちりこころちりこころちりこころちりこころ  
ちりこころちりこころちりこころちりこころちりこころ

第四 月日つてちりこころちりこころちりこころちりこころちりこころ

ちりこころちりこころちりこころちりこころちりこころ  
ちりこころちりこころちりこころちりこころちりこころ  
ちりこころちりこころちりこころちりこころちりこころ

〇唐化ノ章向題

同

人

第一 唐ノ法の法位ハいとも唐ノ法の法位ハいとも唐ノ法の法位ハいとも

第二 唐ノ法の法位ハいとも唐ノ法の法位ハいとも唐ノ法の法位ハいとも

物たり一闕茲棚子業紅業紅ちりしるすすうり  
任し人のまれいさるし

和三 ちまろしるすすの世とつと於九重の神まひる  
有快三我まろしるすすの世とつと於九重の神まひる

和四 山吹のまろしるすすの世とつと於九重の神まひる  
思ひ捨くまろしるすすの世とつと於九重の神まひる

第五

第二期試験課目并問題

十六年六月廿二日ヨリ内廿七日ニ至ル

○唐宋八大家文

岡松

第一

今學士所作文章多矣至於青祀齋文必用老子浮屠之說  
祈禳秘祝往々近於家人里巷之事而制誥取便於宣詔常  
拘以世俗所謂四六之文

第二

涵畜充溢抑而不発久之慨然曰可矣由是下筆頃刻數千  
言其縱橫上下出入馳驅心造於深微而後止蓋其稟也厚  
故發之遶志也熱故得之精

第三

予聞教學之法本於人性磨操遷革使趨於善其勅於人者

勤其入于人者漸善教者以不倦之意須逢久之功至於礼  
讓興行而風俗純美然後為學之成

○日本書紀 應神天皇以下

飯田

第一

処々海人訖訖不從余云こト如何ナルニヤ又阿曇連ヲシテ其ラ平  
ケシタルハ何ノ由縁ゾ

第二

甘美内宿祢ノ衆ヲ親メ紀伊直ノ祖ニ賜ハリシハ何ニシタルソ又何ノ  
縁故ニテ紀伊直ニ給ヒシヤ

第三

弥菟思利能那伽菟曳能府保語茂利阿伽例蘆塙等咩伊特  
佐伽摩曳那ノ意ヲ解クヘシ

第四

高麗王ノ上表ニ教日本國ト云ル教ト如何ナル義ヲ

第五

仁德天皇七年課役並免ト云ル課ト役トノ差別ハ如何

○源氏物語 帚木卷

佐々木

第一

つゝきことあゝとも杉んじけなのめおひひなりて

第二

なますあきかをけふふくくたまるをもちくさしきものこととを

第三

せうそことちとむせし久く作りしおむげよあおひををれて

第四



弓のあたりの筋をうたふをきけとなんまこゑこゑはしと

第五

風をくしてそこをうとがまきかむのきくこまえ虫をくむ  
まゝひてちのりきほとちり

古今集 卷下

同

上

形をみ山々水の朽本が心は化ふやうなうなうなう  
よのゆきうめものつづ國の長柄の格とちりちり  
考らくのうんとちり世の内さしてなしとちりあはれちり  
うらして世をやつてえさの尾よまえる松がちりちり  
凡そとちりわの白雲いよをちりあはれちりちり

禁秘抄 中巻以下

松岡

第一

服御晴蓑ノ概要

第二

恒例中小祀ノ内貴重ノ器名

第三

詔勅宣命及用紙ノ區別

第四

單ニ別當又判官トアルハ

第五

衝重ノ用並名義

伊勢物語

小杉

第一

伊勢物語をいぬ夏ると見做すへき又ハ小説妻と見做

すきり

第二

なごのみやこ春口の里よきううてくりふいふく

第三

月やあはぬをさやさの春はぬさすひとつはよのぼは

第四

物にあはさるふをぬぢてくらけのまきよてせかをや

第五

昔男をさる人のむすめのを一つくいてこの男は物いそくと  
思ひさううちいそんこさうさやあうけん物やさあうて  
さぬの手と手ふろと我あむいーうといひさるをねやけ  
つそなしくつたさうれい南をむさううれとさふれい

つましくみさりをううとさみちのつさりいあさき  
ころをひふよいあそむをうてねまてや、さー  
風吹くう雲たううといあさるこ男はさせうて  
指くあさる雲の上ましぬへい秋風さとううみつきて勢

○古事記

本居

第一

八尺鏡ノ説

第二

千座置戸ノ解

第三

八塩折之酒ノ釈

第四

夜久毛多都奇ノ解

第五

於心思愛而寢ノ論

○原氏物語 橋姫卷

同

上

第一

あららふあふ車をさまのりしきりぬをせて  
さすひきたまふり

第二

めづらうものちりうもあぢもさるものすちふなほか  
くいひ傳るうぬむやまもあふむ

第三

なふらにちりふよりともちをききたえまつるむ

第四

ういほあのおせまのいあうらうをさるもの思ひ  
うはくやあふま

第五

めまうらそちなるのいんをたふせせ路つ  
○字音假名用格

木村

第一

抑音ト直音ノ區別如何

第二

抑音二百ヲ語記スル方法如何

第三

三行分生図又輕重等第ノ図ヲ製造スル理由如何

第四

嘆音三行ヲ韻鏡ノ上ニテ定ムル方如何

第五

入声字ニヨリテ平上去声字ノ假名ヲ定ムル法如何

○万葉集

同

上

第一

雄略天皇ノ賤女ニ玉ハリシ御歌ノ大意如何

第二

蜻島ト云詞ノ起及之ヲ日本ノ大跡トシタル意如何

第三

高山与耳梨山与相之時トアル語意如何

第四

額田王春秋ヲ判ル奇ニ山年茂又黄葉手波トアルニツノ詞ノ活用如何

第五

菖草刺武良前野逝云々此奇ノ偶意如何

第六

麻績王ノ配所ニ異伝アリ其説如何

第七

人麿朝臣近江菖都ノ奇ノ眼目ハ何レノ処ニアル歟

第八

黒人ノ奇ノ結絳見者悲寸トアルハ常ノ格ト違ハリ此理由如何

第九

豈有ト云詞ノ紐如何

第十

藤原宮ノ役民ノ奇ニ不知因依巨勢道從云々此処ノ文意如何  
○大鏡

久米

第一

大鏡ノ名義并筆曲直用意及代数年数等ハクソ

第二

花山院御出家ハ何緣由ゾ

第三

物氣天狗鬼等當時ニ盛ル何ノ因縁ゾ

第四

當時攝政白ハ藤原氏ニ限ル様ニナル何ノ縁故ゾ

第五

宇多帝ノ管公ヲ拔擢シテ非帝中ニ登用シ玉ヘル聖慮ケラシ如何

○今義解

小中村

第一

宮内省ノ被管ノ諸司ニ殊ニ故實多キ説

第二

軍團ノ制ハ如何

第三

妃夫人嬪女御更衣ノ沿革

第四

東宮春宮ノ差別

第五

大嘗會ノ概田若

○作文  
讀史

久米

東京大學